

a 学校教育目標		b 経営理念 ミッション・ビジョン		【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 地域・保護者の信頼を得て、前進する「チーム三原小」の学校。 「三原小で学んでよかった」といえる学校											
評価計画				自己評価						改善方針		学校関係者評価			
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策等	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方針	l 評価			m コメント	
					h 達成値	h 達成値					適正	不明	不適正		
確かな学力の育成	自ら考え、自ら学びに向う児童の育成	基礎・基本の定着	授業改善・授業力向上(授業モデルの活用、ノート指導、学習ルールの徹底、ICT、相互参観)	単元テスト平均70%以上の児童の割合 ①国語科 思考判断表現 ②算数科 知識・技能 ③算数科 思考判断表現	いずれも80%以上	①93.4% ②91% ③81.4%	①84.1% ②90.5% ③81.9%	①105% ②113% ③102%	A	単元テスト平均値は、いずれの観点も達成することができた。しかし、学年が上がるにつれて達成値が下がっており、算数科思考判断表現においては、高学年76.4%と目標値の80%を下回っている。NRTの標準偏差は、いずれの観点も達成することができた。しかし、5段階分布の学年結果を見ると、2年・5年・6年において80%を下回っていた。	算数科の授業においては、求め方や考え方を比較させたりペアで確かめさせたりして内容理解を図る。また、単元末テストに対応する家庭学習を課したり、自作テストによってテスト後の定着を把握したりすることで、一人一人の学力向上を目指す。桜山タイム(学力朝会)や家庭学習でNRT対策プリントに繰り返し取り組ませる。	○			・改善策に基づき確実に取り組み、達成度が上昇している。  ・引き続き更なる向上を期待する。
			学力向上に向けた取り組みの充実(学力向上強化週間、桜山タイム・学力朝会)	NRTの標準偏差 ①教科総合50以上(各学年) ②5段階分布で3段階以上の児童の割合(全校)	①100% ②80%以上	①100% ②81%	①100% ②101%	A	年間を通してどの項目も肯定的回答が目標値75%を超えることができ、学習意欲が高く、郷土への愛着をもつ児童が多いことが分かる。その一方で②において10月と比べると肯定的回答が4.4%減っており、主体性の成長を感じられていない児童が増えている。児童主体の授業改善により、児童自身が選択し実行する授業づくりに全学級で取り組んでいく必要がある。	引き続き、「広い発問・つなぎ発問・自力解決」という授業の重点を全員で共有し、授業改善を図るため、相互参観や研究授業を実施する。生活科や総合的な学習の時間では、児童が主体となって進めていく探究的な学習活動を中心とすることで、主体性を高めたり、自己の成長を価値付けたりしていく。	○				
豊かな心の育成	生活指導項目の指導の徹底と体験活動の充実による豊かな心の育成	生活指導重点目標5項目の徹底	あいさつ、時間厳守、ピカピカ無言掃除、右側歩行、靴揃えのうち、重点「あいさつ」の徹底	児童による振り返りであいさつの項目が4点以上になる児童の割合	90%	72.0%	73.0%	81.0%	B	あいさつの項目では、73%の児童が自分からできていると回答している。コロナ禍ということで大きな声求めることをせず、黙礼の指導をするなどしていたが、自分からあいさつをする児童は減少傾向にある。	まずあいさつを返すことを第一に指導し、あいさつの意味や意義について、児童と教師とで共有していく必要がある。その際、あいさつがよりよい人間関係をつくるというプラス面を児童が言えるようにし、日常生活に生かせるようにしていく。	○			・5つの指導項目の中から何を第一に指導するかについて、共通化を図り徹底していく方針が良い。  ・挨拶については登下校時に自主的にしてくれる子どもたちが増え、定着を感じる。
			友達の関わり強化認め合う集団づくり	教職員のアンケートの評価(年間3回、学期末実施)	90%	94.7%	100.0%	111.0%	A	あいさつについて指導している教員は100%であり、今後も継続していく必要がある。しかし、指導はしているが児童の良い姿に結びついていないと回答している教員は半数程度おり、児童の姿でみたときに十分な指導ができているとはいえない状況であると考えられる。	あいさつについて児童に響く指導の在り方を考えていかなければならない。あいさつウィークなどの児童会活動は一定期間では効果があったが、ウィークがなくなって少しくらい減ってしまった。SST教材の活用や、あいさつへの必要感、危機感、充実感等、いろいろな角度からの指導を考えていく。	○			
健やかな体	健康教育と教育活動の工夫による運動能力・体力の育成	体力の向上	週3回以上外遊びをして遊ぶ児童	大休日や昼休日に外遊びを週3回以上80%以上。	100%	54.3%	54.3%	C	コロナ禍により、休憩時間を分散して行ったため、週3日以上外遊びをすることができなかった。割り当ての時間に外遊びをした児童は、全体の54%にとどまった。どの学年も「割り当ての時間に遊んだ」と回答した児童は80%を切った。	コロナ禍により、外遊びの習慣化を促す企画を計画したり、運営することができなかったため、割り当ての日だけでも、全員が外遊びを推奨するおうち委員会や担任を通して声掛けをしていく。	○			・コロナ禍の制限ある生活のため評価が下がってしまっているが、外遊びの工夫等されていて良い。  ・家庭での生活習慣について、これまでの取組を継承しながら丁寧な啓発している。  ・タブレットの使用についてはより多くの配慮が求められると感じた。	
			家庭での生活習慣の定着	年2回の生活習慣実態調査の実施、保護者啓発活動の実施	健康週間の調査で、全体の平均が4点以上である児童を90%以上にする。	90%	57.3%	63.2%	70.3%	C	昨年度からの課題であった、TV・タブレット視聴時間については、今年度から記録方法を変更し、累計時間を記入するようにした。結果は、全体を通して、一日の合計が2時間を切り、1.6時間であった。コロナ禍によって、家で過ごす時間が増え、今年度からはchromebookを毎日持ち帰るようになった現状から考えれば、最低限の視聴時間に留めることができたと考えられる。しかし、指標である全体の平均値を4点以上にするまでには至っておらず、金メダルの朝食、起床時間、就寝時間、歯磨き仕上げ・チェックにおいては、課題が見られる。	金メダルの朝食については、引き続き栄養教諭を中心とした、食育を行っていき、児童の関心を高める。起床時間・就寝時間については、前年度と比べると、僅かに数値自体は上昇しているものの、引き続きタブレット等の使用についての指導を行っていき、就寝時間を早めることで、起床時間も早まるようにしていく。歯磨き仕上げ・チェックについては、コロナ禍によって実施できていなかった。学校歯科医による、歯と口の健康についての学習を実施する。	○		
信頼される学校	保護者・地域から信頼される学校づくり	地域を繋ぐ教育活動の工夫	地域の行事への参加 ゲストティーチャーの奨励 幼・保・小・中の連携	各学年、年に1回以上	100%	50%	100%	100%	A	未実施だった学年も以下の通りに実施することができた。 2年生・・・町探検で地域の方と交流 3年生・・・三原だるま保存会の方とオンライン交流 4年生・・・やっさ振興協議会の方からのやっさ指導	昨年に続き、コロナ禍で活動が制限されたが、オンラインなどできることを考え、地域とのつながりをもつことができた。総合的な学習を中心に、来年度も、児童の主体性を大切にしながら計画的に実施していく。	○			・働き方改革の推進は必要だが教育活動の充実には時間がかかるためより一層の業務量の平準化、これまでの会議等の見直し求められると感じた。  ・先生方の激務の様子が分かる。今後も続くコロナ禍でより一層の工夫と努力が求められるだけに先生方にエールを送る
		定期的な情報公開	学年便りの作成 HPの更新	月に1回以上	100%	100%	100%	100%	A	計画的にお便りの発行やHPの更新を行うことができた。また、音楽参観日が中止になったため、保護者に動画を配信することができた。	今後も、行事や授業、生活の様子などを計画的に配信していく。	○			
		働き方改革(次世代の働き方への体制づくり)	計画的な時間外勤務の短縮 業務改善の推進	時間外勤務月45h以下を6か月以上実施	100%	83.3%	86.0%	86.0%	B	時間外勤務月45h以下を6か月以上達成できた職員は86%。 時間外勤務月45hを超える職員が多い月は、4、6、10、12、2月と業務の繁忙期と重なっている。時間外勤務月45h以下を意識している職員は前回より約10%増え66.7%と意識は向上している。	年度始め、年度末、学期始め、成績シーズン等の繁忙期の時間数を確保できる時程を検討し、年間の見直しを持てるスケジュールを設定する。	○			
	水曜日の定時退校日と月1回18:00退校の実施	100%	42.3%	32.1%	32.1%	D	完全実施できた職員は32.1%と前期を下回る結果となった。要因として日々、勤務時間内で収まらない学級事務の積み残し、生徒指導対応等が考えられる。	積極的な生徒指導の推進を行い、未然防止に努める。各学年部で業務の進め方や役割分担の見直し、進捗管理についての確認を行う。							
			教職員のアンケートの評価(年間2回実施)	90%	76.9%	60.4%	67.1%	C	児童と向き合う時間が確保されていると感じる66.7%、業務改善が図られていると感じる54.1%といずれも前回より下回った結果となった。勤務時間内の学年での打ち合わせや授業準備・学級事務の時間が不足していること、各主任への業務量の偏りが要因と考えられる。	各種会議や委員会の精選、校内研修の内容・回数の見直しを行い、学級事務等の時間を確保する。  各分掌内における役割分担の見直しと明確化、業務内容の見直し等を行い、業務量の平準化を図る。					

【j:自己評価 評価】

A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100 C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60

【l:学校関係者評価 評価】

イ:自己評価は適正である。 ハ:わからない。

ロ:自己評価は適正でない。